

修了して現場で学んだこと



助産学専攻科6期生 寺元美樹

私は看護学生のとときに墮胎された赤ちゃんを見る機会がありました。その赤ちゃんはまだ皮膚も薄く外から心臓の動きなどがわかるくらいでした。当然赤ちゃんは生きていたのです。しかし、その赤ちゃんはその後生きることはなく、そっと亡くなっていきました。どんな理由があったのかはわかりません、どんなお母さんだったのかもわかりませんでした。この経験をしたときに、出産の場は喜びばかりではないということを実感しました。助産師の仕事、出産の介助ということに憧れがあり、漠然と「助産師っていいな」と思っていました。喜びだけでないことを知ったときに、辛い経験となった産婦さんへの援助も考えられる助産師になりたいと思うようになりました。これが私の助産師を目指そうと思ったきっかけでした。

そして、平成14年4月に助産学生として新潟県立看護短期大学に入学し、助産のことはもちろん、その他にも女性のライフサイクルについてなど多くのことを学ぶことができました。また、実習でも受け持ちの産婦さんを含め、いろんな産婦さんや指導して下さる助産師さんと出会い、出産するときの気持ちを聞いたり、出産のときの夫婦の美しさを見たり、出産準備のためのマタニティヨーガなどの体験をしました。これらのことから多くのことを学ぶことができました。

現在、私は短期大学助産専攻科を修了してから総合病院に就職しました。しかし、希望していた産科で助産師として妊産婦や新生児の援助をしているのではなく、心臓血管外科と胸部外科の混合病棟で働いていま

す。就職したばかりの頃は、産科で分娩介助をしたかったと思うことが多くありました。2年近くたつ今も思うことはあります。助産学生のと時から先生方から「助産バカにならないようにしなければならない。」と言われていましたが、私は助産バカでもいいと思っていました。そのくらい助産だけに夢中だったのだと思います。

そんなことを思いながら働き始めた私でしたが、今の職場で多くのことを学ぶことができました。しかも、産科で働いていたらあまり経験することができないと思われる、急変や死に立ち会うことも多くありました。病棟の師長さんからも「助産から離れて残念だと思うけど、ここで働いた経験はあなたにとってプラスになることだよ。」と励まされ、この経験は私にとってよかったことなのだと思うようになりました。最初に助産を目指したときに思った、「辛い経験となった産婦さんへの援助」は今の現場で働いていなかったらもしかすると深く考えることができなかつたかもしれない。今の現場で働いた経験から援助をより深く考えることができるかもしれないと思うようになりました。

総合病院に就職すると最初から最後までずっと産科で働けることはまずないことだと思います。助産師として分娩介助など専門にできることはありますが、助産師であると共にまず、看護師であることを忘れてはいけないということを学ぶことができました。